

熱性けいれん

子ども時代はひきつけ(けいれん)をおこすことが時々ありますが、その中で最も多いのがこの熱性けいれんです。

生後半年くらいから5、6歳までの乳幼児におきやすく、日本では約8%の子どもがおこすといわれています。

その場面に出会うととてもびっくりすることと思いますが、できるだけあわてずに対処してください。



世界の
子どもに
ワクチンを

日本委員会

予防接種は？

以前は、1年以内にけいれんをおこしているとは予防接種を受けられませんでした。最近では考え方が変わり、注意をすれば受けることができます。

熱性けいれんの場合には、たちの良いもの(単純型)は、さしつかえありません。たちの悪いもの(複雑型)では、主治医の先生と相談をし、接種についての指示をもらって下さい。

鼻水の薬は要注意

一部の抗ヒスタミン剤(鼻水や皮膚の痒みを抑えるために使う薬)は、発熱時に内服していると、より熱性けいれんをおこしやすいことが分かってきました。古くから使われている薬が該当します。

近年になって開発された薬は問題なく使用できるものが多いです。

当院では熱性けいれん児でも内服できる抗ヒスタミン剤のみを使用しています。



熱性けいれんとは

子どもたちが、急に高熱をだしたときにけいれんをおこすことがあります。多くは全身性のけいれんで、1～2分程度で、自然にとまります。このほか、少ないですが、意識を失うだけのけいれんなどもあります。

まれに1回のけいれんが30分以上続くことがあり、脳の障害が心配になります。

ときには、脳炎・髄膜炎といった、熱性けいれん以外の病気でけいれんをおこしていることもあります。けいれんが止まらないときや、嘔吐を繰り返しているときなど、具合の悪いときには、急いで病院を受診して下さい。

けいれんをおこしたときの対処

①あわてない

けいれんは、普通は数分で止まります。（でも、とても長く感じますが）

②何もしない

舌をかむことはありませんので、口の中に指や箸を入れたりしないで。大声で呼んだり、体を揺すったりもしないで下さい。そっとしてあげるのが大切。

③楽な姿勢に

体を横にねかせ、服をゆるめる。ピンなどの危ないものは取り外して下さい。

④吐きそうなら・・・

吐きそうなしぐさがあれば、体ごと横を向かせ、吐いたものがのどにつまらないようにして下さい。

⑤様子を見る

時計を見て、何分ぐらい続いているか、確かめて下さい。けいれんの様子をよく見て、あとで教えて下さい。

けいれんが止まらないとき

30分以上けいれんがとまらない場合には「けいれん重積」といって、緊急な対処が必要です。

およそ10分以上待ってもけいれんが止まらない時には、病院に連絡をとって下さい。また救急車の手配もして下さい。

けいれんの予防

けいれんを予防する坐薬があります。2回以上熱性けいれんをおこしているときには、使ったほうがいいでしょう。熱に気づいたら早めに使うことで、熱性けいれんをかなり確実に予防してくれます。

たちの良い熱性けいれん

高熱でおきた、発作が15分以内、全身性のけいれん、1日に2回以内、1年に5回以内、もともと脳の障害がない・・・などは、「たちの良い熱性けいれん」です。5、6歳をすぎればおこさなくなります。

そうではない「たちの悪いけいれん」のときは「てんかん」なども心配です。専門の医師によく診てもらって下さい。